



「信頼」と「安心」

園長 野中 泉

11月26日（日）は「根っこのつどい」でした。表紙でもふれましたが、全体報告は実行委員会が次号のATOMっ子で出してくれる予定ですので、ここでは詳しくはふれませんが、いくつかの印象に残ったことの中に、こんな言葉がありました。

「うちの息子にとって、当時の担任のハセちゃん（現志賀保育士）への信頼は絶大で、実は卒園後20年以上たつんですが、人生の節目々で、大事なことは、親には言わなくてもハセちゃんには相談しているらしいんです。それは、親として、本当にありがたい幸せなことだと感謝しています」。

今回の「根っこのつどい」は告知にあつたように午前の部は2003年NHKで放映されたATOM共同保育所のドキュメンタリーを鑑賞し、その後みんなで感想を語り合ったり、意見交換をする時間があつたのですが、その参加者の中には、20年前のドキュメンタリーの出演者でもある卒園児（当時の5歳児）やその当時の保護者の方たちも何人か参加していました。そして、これはその中のひとりの先輩お母さんの言葉です。

このお母さんは、もうひとつ、こんなお話ししてくれました。少しドキュメンタリーのネタバレになってしまいますが、5歳当時クラスの中でひときわ体も大きく力が強かった彼（このお母さんの息子さんです）。家族思いで優しいのにけんかになると友達を殴ってしまうことも多く、しかも決して自分から謝ることはなかった彼にむかって「殴られる側の気持ちも体験してみる」といっつもは一方的に殴られている友達に反対に殴ってもらうように促した市原（当時の所長代理）の当時の対応について、それを聞かされた当時「園（市原）の対応に不安や不信感は抱かなかつたのか？」という問いに対してのお母さんの応えが次の言葉です。

「まったく、思わなかつたですね。たぶんそれは、それまでの日々やりとりの中で、ATOMの先生たちが自分の子のことを親の私よりよく知ってくれているという、信頼と安心があつたからだと思います」

ドキュメンタリーを観終わった直後、卒園児の若者たちは、口々にこんな感想を言いました。「ATOMって、やっぱり、いい保育園やったんやなと思った」「ずっと、こんな保育園をなくさんといほしい」。

彼らの言葉は、もしかしたら100ページの立派なパンフレットよりも雄弁にATOMを宣伝してくれるものかもしれないと、根っこのつどい当日の私はそう言いました。あらためて目の当たりにした卒園後20年たった彼らの頼もしい姿とその言葉は、毎日目の前のことに近視眼的に右往左往してしまいがちな私たちに、確かな未来への道しるべを示してくれたようにも思えたからです。でも、あれから幾日かがたち、こうして文字にしなが、改めて、今も「ATOM」は彼らの大事な場所であり続けているだろうかと自分に仲間に関わっていきます。「信頼」と「安心」。どちらも、形はありません。しかも、こうしたら「信頼」や「安心」が、簡単に確実に手に入りますというようなマニュアルも、どこにもありません。それでも、目にも見えず、正解がないこのふたつの言葉に向かって今日も誠実に四苦八苦し続けている仲間たちの奮闘が、次のATOMの「未来」へとつながっていると信じながら、この原稿を書いています。

当日参加した保護者からも、参加できなかった保護者からも、「ぜひもう一度このドキュメンタリーを観る機会を」というリクエストをもらっています。ぜひ、また観ましょう。そして、今のATOMの皆さんが20年前のATOMを観てどんなことを感じるか。ぜひぜひ、たくさん率直な感想を聞かせてください。（※鑑賞できる方法を考え中です。お待ちくださいね）